

# Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.15 No.10 October 2014

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
「お葬式」考 II  
／深谷忠一 ..... 1
- 天理教教理史断章 (85)  
近愛文書⑥  
／安井幹夫 ..... 2
- 『教祖伝』探究 (4)  
元一日  
／深谷忠一 ..... 3
- 天理教伝道史の諸相 (34)  
余間 1 遠隔地伝道、島の天理教  
／早田一郎 ..... 4
- 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～ (6)  
第1章「もの」と「こと」の意味論④  
／井上昭夫 ..... 5
- 「おふでさき」の有機的展開 (30)  
第四号：第百十六頁～第百三十四頁  
／深谷耕治 ..... 6
- 新宗教のブラジル伝道 (18)  
日本の新宗教の組織的展開②  
／山田政信 ..... 7
- 「いのち」をつなぐ一生死の現象 (34)  
「いのち」について⑤  
／堀内みどり ..... 8
- 東日本大震災と宗教 (4)  
「カフェ・デ・モンク」  
／澤井治郎 ..... 9
- ヴァチカン便り (10)  
法王：韓国を「司牧の旅」として訪問  
／山口英雄 ..... 10
- 図書紹介 (86)  
『神学・政治論』(上)(下)  
／金子 昭 ..... 11
- English Summary ..... 12
- おやさと研究所ニュース ..... 13  
比較思想学会でパネル発表／「宗教と環境」研究会を開催／京都大学こころの未来センターシンポジウムでコメント／2014年度宗教研究会第1回「キリスト教と性」／日本宗教学会第73回学術大会報告／『グローカル天理』合本のご案内／開講20周年記念・公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### 「お葬式」考 II

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

死ぬことを「出直し」といい、“古い着物を脱ぎ棄て、新しい着物に着替えるようなもの”と教えられる天理教で、なぜ葬式を行うのか？ 人の死は終わりではなく再生への出発点である。悲しいことではなくむしろ喜ばしいことであるはずなのに…喪に服すなどというのはおかしいのではないかと問われたことがあります。

しかるに、そういう問いを発する人が、自分の身内や親しい人の死に接した時に、悲しむことなく晴れやかな顔をしていられるかという、決してそうではないでしょう。いわゆる三人称の死を語るのと、二人称の死に接してそれを語るのでは、全く違った話になるのです。

死が身近に感じられるようになった時、人は誰もがそれを忌避しようとして、死が恐ろしいものでなければ、誰もがさっさとこの世と別れを告げて、天国や極楽などに行こうとするかも知れませんが、そうではないのは、この世こそが人間の存在する場所だと決められているからです。この世を離れては存在できないので、誰もがこの世と別れるのを恐れるようになってくる。つまり、人間は、この世で陽気ぐらしをするがために、死を忌避するようにつくられているのです。

他方、死んで別の世界に行くのではなく、またこの世に戻ってくるのなら、出直しのプロセスは不要ではないか？ そのまますぐこの世で生き続けた方が、陽気ぐらしに早く到達できるのではないかと、という意見があります。新生児から大人になるまでのプロセスの時間とエネルギーを考えれば、何度も生まれかわってゼロから始めるのは非効率的ではないか？ という考え

です。例えば、80歳を2度繰り返すより、160年続けて陽気ぐらしへの道を歩んだ方が、より早く目的地に着けるのではないかと、いうことです。

しかし、親神は人間を“無性生殖ではなく有性生殖で子孫を繁栄させる存在”としてつくられました。泥海（いのちの根源の細胞のスープ？）の中から夫婦の雛型を見出して、その原夫婦が逐次場所・環境を変えて生み出した子供たちを、生まれかわり出かわりして成人するようになされました。単に細胞分裂によりいのちを繋いでいくのではなく、“この世の地と天とを象って夫婦をこしらえた”と、男と女が二つ一つで力を合わせて生きていく存在として人間をつくられたのです。

単に親のクローンを作るだけの無性生殖では、そのいのちが何億年続いても同じものしかできませんが、有性生殖であれば、遺伝的多様性が得られ、様々な環境に適応できる子孫をつくることができます。その結果、人間の可能性・楽しみが増えるし、それを見る親神もまたうれしく感じられるのです。つまり、人間が有性生殖を行い、各個体が不死ではないことが、この世を単細胞的な退屈なものにせずに、多種多様な文明・文化の花が咲く進化をもたらすための重要な要素であると考えられるのです。

換言すれば、“誰もが死を忌避することと死を避けえないこと”が、陽気ぐらしをこの世で実現するための必要条件だということです。そして、その人間の“生の喜び・楽しみを味わい進化をする為に死別の悲しみを味わう”というパラドックスを解消する方策・手立てが、出直しの教理であり葬儀の執行ではないかと思う次第です。